

「ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり」をめざして ～通常の学級における支援教育～

門真市立古川橋小学校 向井理恵

1. はじめに

2010年度より、門真市教育研究会支援教育部においては、支援教育の観点に立った通常の学級における「学級づくり」や「授業づくり」について取り組んできた。

LD、ADHD、高機能自閉症等の何らかの支援を必要とする子どもたちは、大半を「通常の学級」で日々の生活を送り、授業を受けているのである。

また、これ以外にも障がいの有無にかかわらず、生活や学習上のなんらかの困難を抱えて子どもたちも通常の学級において過ごしているのである。このように子どもたち一人ひとりが必要としている支援の違いに対応するには、日々の授業をどう工夫していくか、また、その子どもたちの違いをお互いに認め合う集団づくりをどのようにしていくとよいかということが大きな課題となってくる。そこで、支援教育での観点を取り入れ、個のニーズに応じた支援を行うことは、即ち“ないと困る支援”を行うことであり、周りの子どもたちにとっても“あると便利な支援”となるのではないかと考えた。

通常の学級における「全員が参加しやすい、分かる授業」、それが「ユニバーサルデザインを取り入れた授業」につながると考えた。そこで学級全般を整えることで子どもたち一人ひとりに居場所ができ、充実した生活から確かな学びが生まれるものであり、どの子も参加しやすい授業を支援教育部では追及していこうと考えた。

2. 門真市教育研究会支援教育部の3年間のあゆみ

(1) 1年目の取組

脇田小学校1年生においてユニバーサルデザインの視点を取り入れた国語科における音読の授業に取り組んだ。

研究1年目と言うこともあり、校内の授業研究の指導案にユニバーサルの視点が入るようにつけ加えていった。まずは、黒板周りの掲示物の見直し、カーテンの設置等の教室環境の整備をし、見通しが持てるように授業の始めに全体の流れが分かるような工夫等、手軽に取り組める視覚的支援から見直していった。

(2) 2年目の取組

沖小学校3年生において、「書くこと」に重点をおいた国語科の授業に取り組んだ。授業の中で、なるべく言葉だけの指示や説明は避け、視覚的支援を活用した。書画カメラ、デジタル教科書、プレゼンテーションソフトを用いて、児童の興味を引き出す工夫をした。

できるだけ、授業に集中しやすい静かな教室環境にするために、「今どうすべき場面なのか」を目や耳から確認できるようにするために、“おだまりカード”“ひそひそカード”“注目ベル”（聴覚的支援）を用いた。

また、見通しがもてるように、スケジュールボード、学習の流れ、



注目ベル

授業展開のパターン化、タイムタイマーを使うなどの支援を取り入れ授業を行った。



タイム
タイマー

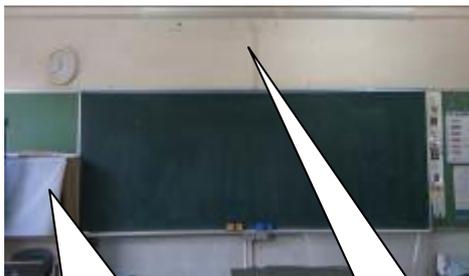
(3) 3年目の取組

研究を始めて3年目にあたる今年度は、古川橋小学校3年生において授業研究を行った。2年間の研究を通して、教室環境の整備の仕方、指導案の書き方、子どもの実態把握を通しての授業づくりについて、ある一定の方向が見えつつあるところである。

1、教室環境について

子どもたちが落ち着いた学校生活を送るためには、まずは、学級においてルールが明確にされ、教室環境が整備されているということが、前提となる。

黒板に集中させるために黒板周りをすっきりとさせ、視覚刺激を少なくしている。



棚は、ブルーのカーテンで中が見えないようにしている。

掲示物は教室の横、後ろに貼るようになっている。



授業で黒板を広く全面で使えるよう、日付は黒板外に出している。



ホワイトボードを活用し、一日の流れが見通せるようになっている。



持ち物の場所を視覚的にはっきりと示している。

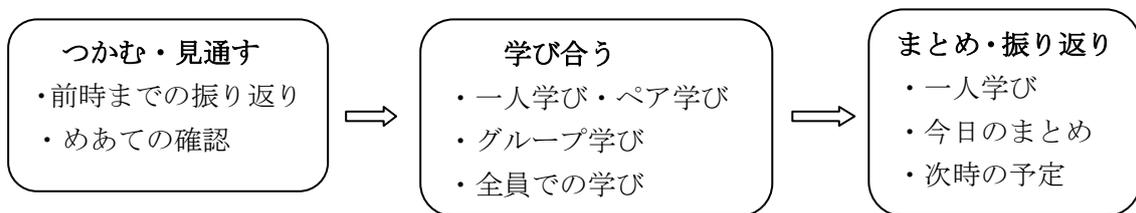
2、授業づくり

国語科（説明文「ありの行列：光村図書」）の授業に1学期取り組んだ。物語文とちがって、イメージをとらえにくい説明文をどうすれば、どの子にも「わかった」「できた」と実感できる授業づくりができるかということを考えていった。そのために次のような視点を盛りこみながら工夫をしていった。

ア、1時間の見通しをもてるようにする。

できるだけ、パターン化できるようにし、本時のめあてを確認した後、1時間の流れをおおまかに示してから授業を開始した。

(授業の構成)



この掲示物を初めて貼った瞬間、「なんか、分かりやすい！！」という子どもの素直な声が聞かれた。

イ、話形（発表名人になろう）を掲示しておき、発表するときの安心感を与える。

自分の考えを言ってから、なぜそのように考えたかという理由をつける話形はほとんどの子どもたちに定着した。友だちの意見を受けての発表の仕方は今後授業に合わせて改良をしていきたいと思っている。



ウ、動作化、視覚化をすることで、内容理解の手助けとなるようにする。



子どもたちには、挿し絵がない教材文を渡している。あり、巣、さとうなどの絵を各班に渡し、教材文を読みながら、絵を実際に動かしてみることで、どの子も教材に向き合うことができた時間となった。

グループで話し合った内容を、みんなの前で交流をする場面である。ペープサートを使って、全員が理解しやすいように工夫をした。読み手、文章にあわせて絵を動かす役は、話し合いの中で自然と決まっていた。どの子も前で、発表したい意欲に満ちていた。



エ、分かりやすいワークシートを用意する。

5	4	3	2	1
ありが、地面に何か埋し込めるようになるまで、おいたのではないかと考えました。	ありが、地面に何か埋し込めるようになるまで、おいたのではないかと考えました。	ありが、地面に何か埋し込めるようになるまで、おいたのではないかと考えました。	ありが、地面に何か埋し込めるようになるまで、おいたのではないかと考えました。	ありが、地面に何か埋し込めるようになるまで、おいたのではないかと考えました。

読むことに抵抗ができるだけ少なくなるように、段落ごとに分かち書きした教材を作った。これにより、子どもたちの発表の中でも、「段落○番目、○文目の・・・」と言うことができ、話し手にとっても聞き手にとっても文章の中を指し示す手がかりに役立ったようだ。

オ、要点をまとめるとき、子どもの個人差を考慮し、ヒントカードを用意した。必要な子どもには自分で選択させるなど、子どものニーズに合わせるようにする。

ヒントカードA

【キーワード】
はたらきあり・ありの行く手をささえる・
道しるべ・ウイルソン

ヒントカードB

ウイルソンは、ありの行く手をささえる
実けんをして、はたらきありが、地面に何か道
しるべになるものをつけておいたのではないかと
考えた。

ヒントカードAは、内容は理解しているが、要点をまとめることを苦手としている子どもに手渡した。
ヒントカードBは内容理解につまずきが見られる支援学級に在籍している子どもに手渡した。視写をすることで同じワークシートを使っていくことができた。

3. おわりに

門真市教育研究会支援教育部として、「ユニバーサルデザインを取り入れた通常の学級での授業づくり」というテーマで研究をはじめて3年目。部員のほとんどは支援学級の担任であるため、支援学級担任を離れると、教科の研究部会に移る人がほとんどで、継続的な研究ができないのが、部会としての悩みでもあった。しかしながら、今年度は、通常の学級を担任しながら、そのまま支援教育部会に残る人も私を含めて3名いた。部会の中でいつも議論に上るのが、「ユニバーサルの大切さ、必要性を市内全体に発信することができないか」ということである。今回、4月に転勤をしたばかりではあったが、6月早々に授業研究をすることになったのも、1学期の段階でユニバーサルの大切さを分かりやすく発信するには授業を公開するしかないということになったからである。当然、準備不足も多々あったこととは思うが、研究授業を部員の協力を得ながら、なんとか公開することができた。

ユニバーサルデザインの授業にとって大切なことは「みんながやる・みんなで作る」ということである。研究に取り組みはじめた年、部員数人で高槻市立五領小学校の授業を見に行った。「チーム五領」を合い言葉にし、全教職員が共通理解のもと、あらゆる教育活動をチーム一丸となって取り組んでいる様子を見ることができた。本市教研としても、「チーム門真市」を合い言葉にこの研究を広めていきたいとそれぞれの部員は思っている。この3年間、それぞれの公開授業は校内の研究テーマに沿いながら、子どものニーズに沿ったユニバーサルの視点を盛り込んで取り組んできたものである。

しかし、ユニバーサルデザインの落とし穴は「形」だけを取り入れれば、「わかる・できる」ユニバーサルデザインになるわけではありません。ユニバーサルデザインとは誰にでも使いやすいものである。単に個別の配慮をするだけでは授業はわかりにくいままである。ユニバーサルデザインが目指すものは「すべての子どもたちが楽しくわかる・できるように工夫・配慮された通常の学級における授業」である。授業を『視覚化』する（挿絵・動作化・写真・動画など）ことにより内容のイメージ化を図ることはできるが、大切なことはそのイメージを基盤にして論理付けしていかなければ「わかる・できる」まで到達しないということである。そのためにも、ペア学習やグループ学習の中で、自分の考えを述べたり、友だちの発言を共有することが大切だと思われる。これからも、子どもの主体的な学習を促し、思考を深めていくためにも、支援学級の観点を取り入れた教科教育も追求していく必要があると考えている。

この取組が各学校、市全体の取り組みへとつながり、子どもたちが毎日安心して学校に通い、楽しんで授業に取り組む姿がそれぞれの学校で日常的に見られるよう、今後も各校間の情報交流を深めていきたいと考えている。